1　単語

単語		
行	単語	意味
3	Crusade	(名) 十字軍、聖戦
5	yell	(動) 大声を上げる、鋭く叫ぶ
6	await	(動)〜を待つ、待ち受ける
7	adaptability	(名) 順応性、適応性
	star	(動) 出演する
11	intrigue	(動) 陰謀を企てる、策略をめぐらす
15	backdrop	(名)（劇場の）背景幕、背景
18	polemical	(形) 論争の、論争を巻き起こす
20	sinister	(形) 悪意のある、不運な
	villain	(名) 悪人、悪者
22	metaphor	(名) 隠喩、暗喩
26	efflorescence	(名) 開花、風解
31	connotation	(名) 言外の意味、含蓄
33	Orthodox	(形) 正統の、公認された
35	sack	(動)〜を得る
36	cleric	(名) 聖職者
46	alluring	(形) 誘惑する、心を奪う

2　全体のまとめ

前回はグダグダ書きすぎたので今回はすっきりを目指します。というか、今回は時間がなかったので、大事そうな所だけ拾ってみることにします。（たぶん、読んでも分からない可能性があるけど、ご容赦ください）どうせあの人の事だから、問題で聞かれるのは最初の数ページでしょう。というわけで、最初に重点を置いて、後半は適当にということで・・・。

今回の英文のテーマはご存じのとおり *Crusade* です。この *Crusade* の歴史的な背景を追っていくのが本文の内容です。もともと、1095 年にイエルサレム（キリスト教の聖地）はイスラム教国に支配されていました。イエルサレムを取り戻そうと、十字軍を送ったのが始まりです。十字軍では、人々を戦場に連れ出すために、戦えば罪（宗教的な意味での）がなくなるとか、地獄での苦痛から逃れることができるとか都合のいいように言ったわけです。んで、たくさんの人々が戦場に出てきてくれたおかげで、無事イエルサレムを取り戻すことができたのですが、（多くの死者を出しながらも）1187 年にサラディンによって、再びイエルサレムは占領されてしまいます。そして、その後もイエルサレム奪還にヨーロッパ側は燃えるわけですが、エジプトのマムルーク朝によって阻まれていきます。しかし、Crusade の考え方は、根強く残っていきます。そして、この考え方は騎士道の精神と絡み合っていくことになります。具体的には、勇敢さとか団結だとか、神のために戦うとかだそうです。ここまでが、13,14 世紀ぐらいまでの事だそうです。（ヘンリー４世の話は省略して）15 世紀になると、オスマントルコが盛んに東ヨーロッパを攻めてきて、Crusade（聖戦；異教徒との対立。おそ

らく、そこから転じてイデオロギーの違いによる対立になったんじゃない、たぶん。）の意欲を刺激してくるんですが、西ヨーロッパとの宗教的な対立だとか、バルト海沿岸の地域がキリスト教に改宗されたことで聖戦のきっかけがなくなてしまったために、この時期急速に聖戦は減少していくことになります。さらに、18 世紀になると、聖戦は様々な人々にけなされていったそうです。（ウイリアム、ボルテール・・・など）ところが 19 世紀になると再び聖戦は西ヨーロッパの人々によって、関心を持たれることになります。理由は二点あって、一つはスコットの小説のなかで、聖戦に対する好印象を与えることができたこと、もうひとつは東の地域への関心が中世の聖戦の考えを再度考えるきっかけとなったことだそうです。19 世紀になってオスマントルコの勢いが弱まったことで、ヨーロッパの政治的な権力がイスラム教徒にまで及び始めたということも考えられるそうです。（この後になんか書いてありますが、無視しましょう、要は聖戦が 19 世紀に力を持っていたということにすぎないので。）

この辺から勝手ながら適当にします。（今までも十分適当だけど）時代はなんか第一次世界大戦のころになります。聖戦の考え方が、勝利という一つの目標に向かって、士気を高めるとかいうことだと思います。（この時代は帝国主義の時代なので、各国が植民地を求めて争っていました。）アメリカとかフランスとか、ドイツとかでも聖戦の考え方は利用されていたそうです。んで、一番最後に使ったのはスペインのフランコなんだそうです。

第二次政界大戦になります。聖戦のイメージはどんどん薄れていったそうですが、聖戦の考え方は依然として残っていたそうです。これは、シーア派などでは、言葉で伝承したり、歌を使っていたそうです。これ以後の内容では、ヴィルヘルム二世[*1]とか、ナセル[*2]とかでてきますが、たぶん聖戦の論理を利用して、自分の計画を推し進めていったとかじゃないかなと勝手に想像しています。（正直あんまり読んでません）要するに、戦争の正当性を主張するために聖戦という言葉を使っているんだということが伝えたいのかなと思います。（ブッシュのところも）

さあ、筆者の締めくくっている結論ですね。聖戦は領土を取り戻す戦争と認識されているから、19 世紀において植民地・帝国主義の企てに類似点が見られる。にもかかわらず、聖戦は倫理的な権利をもって良い目的のために戦うという意味で、西洋世界において魅力的な考えなんだそうです。

今回はかなり粗いまとめで、すんません。

[*1] 帝国主義的な膨張政策を展開したが、拙劣な外交で列強との対立を招き、ドイツを第一次世界大戦へと導いた。

[*2] スエズ運河の国有化を宣言し、スエズ戦争（第二次中東戦争）でその承認を勝ち取る。

しかし、アラブの大同団結を目指して 1958 年にシリアと結成したアラブ連合共和国は 3 年後のシリアの脱退で崩壊し、ナーセルの威信に揺らぎが見え始める。特に 1967 年、エジプトはイスラエルとの第三次中東戦争（六日戦争）が惨敗に終わり、国土の東部を占めるシナイ半島がイスラエルに占領される